

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-141	16-318	慶應義塾大学
<b>題名 (原題/訳)</b> Daily relations among affect, urge, targeted naltrexone, and alcohol use in young adults. 若年成人における情動、衝動、目標とされたナルトレキソンとアルコール摂取の間の毎日の関係		
<b>執筆者</b> Bold KW <sup>1</sup> , Fucito LM <sup>1</sup> , Corbin WR <sup>2</sup> , DeMartini KS <sup>1</sup> , Leeman RF <sup>1</sup> , Kranzler HR <sup>3</sup> , O'Malley SS <sup>1</sup> .		
<b>掲載誌</b> Exp Clin Psychopharmacol. 2016 Oct;24(5):367-375.		
<b>キーワード</b> ナルトレキソン、飲酒渴望、アルコール急性中毒、		<b>PMID:</b> 27690505
<b>要旨</b> <p>若年成人の間の暴飲は、深刻な公衆衛生問題である。ナルトレキソン（オピオイド・アンタゴニスト）は、プラセボと比較して若年成人で飲酒を減らすことが示されており、必要時に的を絞った（すなわち、必要に応じて）ペースで服用することもできる。飲酒の危険因子と若年成人の個人におけるナルトレキシソンの効果を理解することは、的を絞ったナルトレキシソンの使用を最適化するのを助ける可能性がある。</p> <p>本研究は、ナルトレキソン 25mg を毎日服用し、それに加えて的を絞った 25mg の服用追加をするプラセボとの二重盲検臨床試験に登録された 127 人（女性 40 人）の若年成人（年齢 18-25 才）の日々の日記データの 2 番目の分析である。急性中毒となるまで（推定された血中アルコール濃度（BAC 0.08g%）と定義される）飲む危険のある日に 25 mg を追加服用し、日々の情動、衝動への薬物の影響を階層的な線形モデルで調査した。得られた結果では、衝動は個人内の正の情動による飲酒と毎日のレベルで有意に影響していることを示した。具体的には、陽性情動は飲むより大きな飲酒への衝動と関係し、それは BAC 0.08g% のより大きな確率で関係していた。さらにまた、より大きな陽性情動と衝動のある日は、的を絞って薬物を追加でとることと関係し、それはプラセボと比較するとナルトレキソン群では、ほぼ 23% でアルコール急性中毒となる可能性を減らした。アルコール依存症者の性と家族歴は、これらの日々のレベル効果の調節因子として調べられた。これらの結果は、ナルトレキソンが若年成人でアルコール消費を減らし、そして、暴飲に関連した個人内のリスク・プロセスを同定し、この集団のためにアルコール関連の介入に知らせることができることをさらに証明する証拠となる。</p>		